

第三節

色即是空と人間観

舍利子

色不異空 空不異色

色即是空 空即是色

受想行識 亦復如是

【漢文直訳】

舍利子よ、色は空に異ならず。空は色に異ならず。色はすなわちこれ空なり、空はすなわちこれ色なり。受想行識もまたかくのごとし。

【サンスクリット語直訳】

ここでシャーリプットラよ、色かたちはそのものずばり空なるものであり、そのものずばり空なるものこそが色かたちなのであり、そのものずばり空なるものは色かたちと異なることなく、色かたちはそのものずばり空なるものと異なることなく、およそ色かたちなるものはそのものずばり空なるものであり、およそそのものずばり空なるものは色かたちなるものであり、〔五つの集まりのうち、色かたち以外の〕感受作用も識別作用も記憶力などの作用も判断作用もこれとまったくおなじである。

【現代用語による解釈】

〔定義：空は《宇宙の根源》であり、《宇宙の理念》である〕

〔再定義：『人間』を、『色と受想行識』の二つの立場に分離する。『色』は人間の精神性の本質部分である。受想行識は色以外の部分である。と再定義された〕

観音様は舍利子に説く。

舍利子よ。

色の立場からみれば、色は空と違いはなく、空そのものである。

そして空の立場から見れば、空は色と違いはなく、色そのものである。

さらに、色から空には直ちに帰還できるし、空から色にも直ちに展開できる。

そして、受想行識も、色と同様である。

□観音様から舍利子への説教はここから始まるのであり、観音様の言葉として理解すべきである。
ここで、般若心経の基本的原理が示されることになる。

□『多元理論』により、空が《宇宙の理念》であると同時に、『超実体』であると定義されたことによって、ここから一気に大展開する。従来の「実体が無い空」では決して到達できない世界

が展開する。

□先ず、『色』と『受想行識』の二要素が人間の構成要素である、との再定義がここで成される。

この再定義により、『人間』とは『色』と『受想行識』の二つの立場に分離している、とされた。

□そもそも、初期仏教に於いて、色声香味触法の「色」は日本語と同じ「いろ」の意味であった。さらに、それが転じて属性として必ず「いろ」を持つ「物体」の意味に成り、次に「人間」の物体要素である「肉体」の意味にまで成った。初期仏教ではこれらが混在している。そして、初期仏教では受想行識が、「人間」の精神要素である。

それがさらに般若心経では、人間の【本質部分】を示す語句として『色』と再定義されたと考えれば、実に自然な流れでもある。

『色』と対になる『受想行識』については、我々人間が自分自身として意識している部分を示す語句として、『四文字』を一つの塊として再定義された事になる。

これだけでは中々イメージを作れないと思うが、詳しくは次第に説明していくことにする。

□この節をそのまま解釈すれば、色は空との間に違いはなく、その空もまた色との間に違いは無い。

そして最後に受想行識 亦復如是が付いているから、同じように、受想行識も空との間に違いはなく、その空もまた受想行識との間に違いは無い。

一言で言ってしまうればこれまでだが、これは実は大変なことを説いているのだ。

これまでの説明からは、空とは究極の存在であり、それは《宇宙の理念》であり、『超実体』と一体不可分であり、その空という存在が、色と同じであり、受想行識とも同じである、と言いつ切っていることになる。

『人間』の二つの要素である『色と受想行識』は、どちらも空そのものであると断定していることは、どんなに驚いても驚きすぎることは無い。

これが一体どれほどの重要な意味があるのか、については次第に明らかになる。ここでは、色も受想行識も、そのどちらも《宇宙の理念》そのものであり、『超実体』なのだ、という意味になる。

従ってこの節で説かれる空は、空そのもの、そのものずばり空、即ち完全空なのであって、他の節の空とは明確に区別されることになる。

そうは言っても、空とは『超実体』であって、同時に『多元領域Ⅰ』の存在であり、現実には「人間」は『二元領域』の世界に生きていて、このままでは空と一体であるとの自覚は持てないし、何も出来ないが、その現実の世界の「人間」と空の世界を繋ごうとするのが、次の色即是空、空即是色なのである。「人間」は空であるのだから、それは出来るのである。

そこで先ず、色即是空と空即是色の説明から始めることにする。

その事の重要性に関しては、空に関しての概念が出そろった第四節に於いて、もう一度詳しく説明することにする。

◆解説キー◆ 「不異」は時間軸を超越した世界の世界の概念。「即是」は時間軸を超越した世界の世界の概念と、時間軸に拘束された世界の世界の概念を繋ぐプロセスの意味。

□時間軸に拘束されている「人間」には、色不異空、空不異色よりも、時間経過を含む色即是空、空即是色がなじみやすい。

『色と受想行識』の構造

ここで、『色と受想行識』について、多少明確にしてから、先に進みたい。

般若心経では、『人間』を『色と受想行識』とに、分けて説明している。先ず、この『人間』を『色と受想行識』の二つに分離できる」という事実が重大視点である。その重大意味に関しては後に話す。

先ず、『色と受想行識』について、もっと説明が必要だろう。

他の解説書に依れば、色を「肉体」と訳しているものが多いのだが、それでは、何かまるで、気持ちの通わない、無機質な物体と捉えられがちであり、般若心経解釈に於ける本書の立場は、決してそうではない。

既に説明したように、そして後に詳しく説明するように、色も受想行識も初期仏教で定義したような、肉体と精神という単純な説明はここでは完全に否定されてることに注意を要する。

初期仏教のイメージを払拭できないために、元は肉体の意味であった色に対して、それはあたかも、魂の抜け殻の肉体のように思う人も居ると思うが、実は全くそうではない。

色とは空の最深部に直結した意識を持ち、それを超越意識と呼称する。

そして、受想行識も、空に直結した超越意識を持つ。『色と受想行識』は超越意識を共有しているので、色は最終的には受想行識を取り込んで一体化することになる。超越意識は『多元領域Ⅰ』である。

受想行識の超越意識は、色の超越意識から生まれたものであり、一体化し、分離することも可能である。(巻頭図を参照)

頭在意識は、我々が常に確認できる表面の意識であるが、これ以上の分析的表現は、般若心経の趣旨に反するので控えたい。

読者としては、概略のみの理解で、分析的にならずに、先ずは全体像を把握する事に注力して、読み進んでいただきたい。

色の超越意識は最深部と直結していて、その情報は色に投影され、そして色から受想行識にも投影されて来る。

色は、肉体を含む超越意識そのものであり、そして肉体は超越意識によって直接コントロールされている。

従って、肉体は、色の出張所であり、受想行識の仮の住まいと言える。

受想行識はその一部に頭在意識として、現実を生きるための情報収集と判断の機能を持っている。そして、潜在意識は記憶の整理の箇所でもあり、玉石混淆である。

そして、肉体は色と受想行識で共有していることになる。

当然、超越意識、潜在意識、頭在意識の三層の情報は色と受想行識で一部共有されている。

ただし、受想行識は、自由に行動することが許されているので、見かけ上ではあるが、色から切り離れて動くことが可能である。

先ずは、これだけの理解で読み進んでいただきたい。

地上に於ける《宇宙の生命活動》においては、『色と受想行識』の共同作業である。言ってみれば、色が司令部の立場で、現地部隊の受想行識をサポートすることになる。この色に最も積極的な意味を与えて、以下を解釈していきたいと考えている。『色と受想行識』は本質的に一体であるが、役割として一時的に二つに分離したと考える。

地上に於ける《宇宙の生命活動》の展開のために、この色こそ肉体を含めた『人間』の精神構造の基本部分を形成していて、『人間』の運命の全体をコントロールしている。

ここで、色も受想行識も、初期仏教時代の元々の意味は完全に失われている事になるが、このような語句の使用例はどこにでも有ることであり、決して珍しいことではない。我々の身近な例で言えば、心が宿る臓器という意味から、「心臓」と命名された臓器があるが、歴史の中で、名前だけが残って、元々の意味は完全に失われている。他にもこのような例は事欠かない。

◆解説キー◆ 比喩も又、フラクタルである。

□ここで、一つ、比喩を示そう。

「人間」の筋肉には、随意筋と不随意筋と二つの種類があつて、手足の筋肉は随意筋であり、「人間」の自由思考（←意思）で自由に動かすことが出来るが、胃や心臓の筋肉は不随意筋であり、「人間」の自由思考（←意思）で動かすことは出来ない。そして、それであつてこそ、人体は最も適切に全体がバランス良く機能するように成っている。「人間」の生命を維持する最も基本的で最も重要な部分は自由意思が直接介在しないように、全て不随意筋が受け持っていて、人体というシステムは正常に動いている。

もう少し詳しく説明すれば、随意筋は随意神経系の支配下に有り、不随意筋は不随意神経系の支配下に有り、それは自律神経系と呼ばれ、文字通り自律して働いている。さらに自律神経系は、相反する機能の、交感神経系と副交感神経系から成り、両神経系のバランスの下に個別の内臓諸器官を動かし、人体全ての内臓諸器官の働きを調整し、循環・呼吸・消化・発汗・体温調節・内分泌機能・生殖機能・代謝等のバランスを取りつつ、人体のシステムを動かしている。不随意神経系は、構造的には随意神経系と分離されていて、間接的には関連しながら、おおむね独立している。

これは人体のシステムとしてそう設計されている、ということなのだ。

ここまでの表記は、確かに比喩として示したのだが、もし、これが、『色と受想行識』の、実例として示したとしても、あながち間違いではない。

ただし、不随意筋が色で、随意筋が受想行識という意味ではない。

《宇宙》と人体システムには、次元を越えた見事な相関関係、即ち、『空のフラクタル構造』がある。『フラクタル構造』は次元を越えて互いに共鳴する。それを『フラクタル共鳴』と呼称する。

◆解説キー◆ 色とは、『人間』というシステムの基本構造であり、《宇宙の理念》の立場を確保して、受想行識をサポートするための、「不随意思考」の機能である。そして、受想行識とは、色の下で、現場判断を優先的に委ねられた「随意思考」の機能である。

□ここで、比喩を離れて元に戻れば、受想行識とは「随意思考」と「随意行動」のことであり、通常の思考のことである。そして、それ以外に、より本質的な色としての「不随意思考」と「不随意行動」があり、これこそが『人間』の本質である。そしてここで示した人体の比喩は、空とのフラクタル関係を形成しているものであることも、既にご理解いただけたと思う。

【重要語句の再定義】

以上の説明が、本書における、『色と受想行識』の再定義である。そして、『色と受想行識』の、二つの立場に分離した理由とその説明である。

□色とは空に近いのではなく、変換投影したのでもなく、色とはそのものずばり空なのである。この色こそが、空であり、『宇宙の根源』に直結していて、『宇宙の理念』そのままである。「不随意思考」と「不随意行動」は空からの思考と行動であり、空に徹して、『宇宙の理念』を表現しようとしているのだ。

そしてもちろん、受想行識も、色に多層次元的に一体化していて、色の主導により、『宇宙の理念』を表現しようとしているのだ。

□ここで、「随意思考」は、しばしば「随意行動」を伴い、「不随意思考」も「不随意行動」を伴うことがある。

ただし、表現の複雑さを避けるため、適宜、「随意思考」と「随意行動」は・・・、』とせずに、『「随意思考」は・・・、』と表記する。

さらに、色は受想行識の自由思考を尊重して、それを支えながら、統合的に『宇宙の理念』を表現し、『宇宙の生命活動』を展開している、言うことになる。

『人間』とは、『宇宙の生命活動』の最前線に派遣された生命体である。

『色と受想行識』との関係は、比喩とすれば、アポロ十一号の司令船と月着陸船との関係である。

比喩を続ければ、司令船に居る人間は、地球上に居る人間と違いは無い。地球上に居る人間は、司令船に居る人間と違いは無い。司令船に居る人間は直ぐに地球に戻れる。地球に居る人間は直ぐに司令船に行ける。月着陸船に居る人間も同じである。という事になる。

般若心経では、『色と受想行識』との両者を対等に扱っているように見えるが、この二者の関係は、言ってみれば、色は『宇宙の根源』から『宇宙の生命活動』のために派遣した司令船で、空との連絡を絶やさない。一方、受想行識は最前線の現地の実働部隊であり、現場での自由判断を任されている。このように、二者の立場には大きな違いがある。

この第三節で、『人間』を『色と受想行識』とに分離して説明している第一の理由は、『「不随意思考」と「随意思考」の二つの立場の自分が存在している』ことを明確に示すことにある。第二の理由は、『死後の帰還の仕方に違いがある』ことにある。

◆解説キー◆ 空こそ、『人間』の本質である。

□『「人間」とは自分の「随意思考」により、自由意思で運命を作り、他から独立して生きていくと錯覚している』のだが、『基本的には、既に空の最深部に直結した超越意識からのコントロール下であって、殆どの運命の重要な決定は「不随意思考」で成され、生かされればなしに、生かされている存在である』と言うのが真実である。

この真実をこそ、しっかりと受け止めることが、大いなる救われに繋がるのだ。

赤子を見るがいい。赤子は殆ど「不随意思考」だけで生きている。「随意思考」は未発達であっても、最大限生命力を発揮していて、『宇宙の生命活動』そのものの表現ではないか。

ここで以後しばしば、色を「不随意思考」と呼称し、受想行識を「随意思考」と呼称することがある。

◆解説キー◆ 「人間」が現実に求める理想の思考は、「不随意思考」の主導の下に「随意思考」が一体化した、「超越思考」である。

□ここで「超越思考」とは、いわゆる思考ではなく、思考以前の心の姿勢（ベクトル）に重きを置いた表現である。従って「超越思考」とは「超越姿勢」と、「超越姿勢」から生まれる「超越思考」と、「超越姿勢」の結果である「超越行動」をも含むものとする。

□ここで、「不随意思考」の不随意とは、受想行識の立場からの呼称であり、空と一体化した色の立場からは当然の如く「随意」なのである。そして、この認識はとても重要である。

人体に於ける不随意神経系その緻密さと複雑さからも十分類推できるが、「不随意思考システム」は目に見えないだけで、不随意神経系と、同等以上の緻密さと複雑さから成る高度なシステムであることは疑いようが無いことなのだ。決して雲みたくない、曖昧な話ではないのである。

悟りを得れば、「不随意思考」の存在を大前提として生きることになる。それを大前提とすれば、その存在をしっかりと感じ取ることはできるのだ。

ところで、悟りを得ていなくても、その存在を大前提として生きる事は十分可能であり、それをやる事は間違いなく悟りに近づくことになる。

完全なる空の立場からの説明

□空の立場、即ち、時間軸を超越した、『超実体』の立場から言えば、色は空と等しく、受想行識も空に等しい。色も受想行識も、このまま空である。

この第三節の最初のテーマは『本来的に、色不異空、空不異色なのである』とするのは既に明確であろう。

さらに色不異空、空不異色と、前後を入れ替えた繰り返し表現となるのは無駄と思う人も居るだろう。しかしそれは全く違うのである。この繰り返し表現は「数学的に必要十分条件を満たしている」ことを意味し、重大な意味がある。この繰り返し表現が成立することは、色と空とは「論理的に完全に同じもの」という意味になる。さすがインドは数学発祥の地と言われるだけのことはある、と思うところである。

一方、受想行識、亦復如是の意味は、『受想行識もそのまま空である。』という意味になる。これは驚異の真実である。これは中々実感できないが、これを真実として受け入れることは生きる勇気に繋がる。

これを実感できるのは観音様であり、肉体を持たない観音様が、時間軸を超越した『超実体』としての立場から説いた真実である。観音様は常に『超実体』の立場で発言しているのであり、これがこのまま現実世界で通用することではない。

もし、これがこのまま現実に通用するのであれば、般若波羅蜜多の瞑想と行も、これから始まる「無の修行」も一切必要が無いことになり、自己矛盾を生じていることになる。

ここは受想行識は本来空そのものであると説明したいが故に、『超実体』の立場から、先ず原則論を示し、次にそこに至る方法論を示そうとしているのだ。それ故に、肉の身を持って現実を生きる我々「人間」としては、この真実を現実世界に適應するように、工夫をしなければならぬのだ。そのための修行が般若波羅蜜多の瞑想と行であり、第五節から始まる「無の修行」

である。

結論から言えば、色はそのまま空である。色として活動している時、空から役割を持って分離して活動しているが、色は空そのものである。受想行識も同じであり、空そのものである。

即ち、空は色そのものなので、空の事は色の事として、色の事は、受想行識の事として、完全な情報共有が成されている。

空の『多元構造』と色の『多元構造』は、完全に重複する『多元構造』として、情報を完全共有している。そして、色の事は、受想行識の事として、即ち、自分のこととして、理解することになる。

現実問題として、「随意思考」としての受想行識には、その自覚が無い。それ故に、その自覚を持つまでの修行が必要であり、それが般若波羅蜜多の瞑想と行である。

□般若波羅蜜多の瞑想と行の体験を積むにつれて、実際に色即是空、空即是色 受想行識 亦復如是は、体験できるようになる。

瞑想時には「随意思考」が不活性になるので、一時的に「不随意思考」が優先的に作用する状態を創り出すことが出来る。

この時、色は受想行識を支えて、空に連れて行き、色即是空の状態を保って、空から生命エネルギーを急速に充電して、受想行識に注入し、生命エネルギーを受け渡し、再び空即是色として、受想行識を主導して降りてきて、その活動を支える。

覚醒すればこのように、受想行識を主導するための色即是空 空即是色は頻繁に行われることになる。

『多元構造』の中で実際に成されている『超実体』の活動内容は、この受想行識の「随意思考」の限られた機能では、とても全てを押し量ることは出来ない。「出来ない」と知ることも一つの悟りである。だから、顕在意識での確認の必要は無いのである。

ただし、必要なことは色が全て判断して、最も適切に動いているのである。即ち、それが「不随意思考」主導による「超越思考」である。当然、受想行識にも、情報は全て伝わっている。伝わっていても、それを顕在意識でいちいち確認する必要は無い。知らなくても良いのである。このことは、悟りにとってとても重要である。

それだからこそ、作為無く思考し行動できることになるのだ。作為の有る思考と行動は、限定した「随意思考」そのものであり、決して超越思考には至らない。言い換えれば、作為の無い思考と行動を目指せば、超越思考に至るのだ。

□時間軸上での解釈であれば、いつでも、色から直ちに空に帰還できるし、空から直ちに色に展開できることはこれで理解できた筈だ。

そして一方、受想行識も、空の立場からは同じ空であるが、時間軸上では、「随意思考」である受想行識は修行の対象であり、修行をして、即ち自分の自由意思で、「空への帰還」を果たすことが出来るようになる。

色即是空で帰還した先の空には、色本来の居場所が確保されていて、そこを自空という。受想行識の帰還先も当然この自空である。

自空は、色の根源であり、完全空から生命活動の中の一部の役割を与えられ、役割に適するように一部の存在濃度を高く、そして強く変えた空の領域であり、それはやはり完全空である。(巻

頭図を参照)

比喩で言えば、司令船も月着陸船も最終的に同じ地球の基地に戻ってくる。

□ここまでの説明から、重要な結論として、『「人間」が現実に求めるべき、理想の思考は、「超越思考」であり、それは「不随意思考」主導の「随意思考」である』

そして特に、「超越思考」に反する随意思考を「分裂思考」と呼称することにする。

一方、般若心経の編纂者は、受想行識 亦復如是として、『色と受想行識』を同等に扱おうとしていることも見逃せない事実である。

これは編纂者の思慮深い見解であり、編纂者の悟りの深さを如実に示している見解であり、その見解を尊重しつつ、以下に解釈を進めていきたい。

◆解説キー◆ 悟りを完成させる対象となるのは、色ではなく、常に受想行識である。色は超越意識における体験の蓄積という超越的進化は存在するが、その内容が、受想行識とは、全く異なるので、ここでは触れない。

空の時間軸上での解釈

《宇宙》全体を示す皆空と、そのものずばり空（完全空）が出たところで、般若心経の趣旨を纏めて示しておきたい。

◆解説キー◆ 『超実体』が《宇宙の理念》を持つのか、《宇宙の理念》が『超実体』を持つのか、それを議論することは不可能である。両方が「同時」に存在すると理解する以外にない。

□『同時』ということは、一体、不可分ということであり、ここでの《宇宙の理念》と『超実体』と、どちらが先か、とか、どちらが原因か、という議論は不可、ということである。

◆解説キー◆ 完全空は《宇宙の理念》である。従って完全空は『超実体』である。色も受想行識も『超実体』であり、完全空である。

□『多元理論』に立てば、完全空とは『超実体』そのものであり、色はそのものずばり『超実体』である。受想行識も同じである。

その『人間』の名前は、色が代表しているプロジェクト名である。

『人間』はその『多元構造』を持ち、その全次元を貫いて、《宇宙の理念》を表現しつつ、生きる存在である。

空は、《宇宙の理念》であり、『超実体』である。もし「実体が無い」と見えるとしたら、それは次元が異なるからである。低い次元から高い次元を見ようとするからである。

これを『多元理論』と呼称する。ただし、『多元理論』の定義は今後、次第に深められていく。

□本来、《宇宙》とは時間軸を超越した『多元構造』である。しかし、「人間」が生きる世界は時間軸に縛られた世界である。

そこで、現実を生きる「人間」にとっての、空の解釈が必要になる。完全空を現実世界に如何に投影するかという、課題が発生するのだ。

そこからが、まさに宗教と言えらるだろう。

最も基本的な理解としては、「人間」の自覚に依らず、色も受想行識も完全空なのであるが、この自覚を持ったときに、それは即ち『悟りを得た』ときに、『空に成った』と呼称する。これは既に、時間軸上の表現である。この表現を遣うのは、『悟りを得た』と言う意味で、従来からよく遣われる、『空に成った』という言い方を今後も温存したいからである。

よく考えてみると、これは紛らわしい言い方である。『空に成った』とは、不適切な表現である。色不異空 空不異色 受想行識 亦復如是から『人間』は初めから空であった筈だからである。しかし、ここでは、敢えて時間軸上での表現として、「悟りA」からは一步後退した、この表現をも遣うことにする。

『多元構造』を持つ《宇宙》の、目で見える物質の次元だけを見れば、当然無常であり、空虚であり、「からっぽ」である。

悟りを得れば、初めから《宇宙の理念》が満たされていたことを発見する。

言い換えれば、空に到達すれば、『多元構造』であることが理解され、空は「からっぽ」ではなく、《宇宙の理念》が満たされていたことを発見する。

初めは空を外に見て修行をするが、空に到達してみれば、空の中に自分がいることを発見する。さらに、初めから自分は空の中にいたことを理解する。

自分は空の中にいたことを発見する。

その時、空は決して「からっぽ」でも、虚無でもなかったことを発見する。ここで初めて、色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是を実感できるのだ。

※この第三節の全体を引用するのは文章が長くなるので、特に一部を強調したい時を除いて、色不異空、又は色即是空でもって、以下の受想行識を含んだ全体を表現するものとする。

□ここで後の議論に混乱を招かないための工夫をしておく。

先ず『多元領域』と空の関係を纏めておく。五蘊としての『世界』は全領域『多元領域』に対応し、以下の三つの領域から成る。それは即ち『多元領域Ⅰ』『多元領域Ⅱ』『多元領域Ⅲ』である。

後の議論で三種の空はこの三種の領域に対応するように分類されるが、それは後述するとして、ここでは、空性と皆空の関係についてのみ明確にして、先に進む。

般若心経では、観音様の見解である皆空は先の三つの領域を含む『多元領域』で定義されている。一方、本書による空性は『多元領域Ⅲ』でのみ定義される。そこで、観音様の見解の皆空を空性で表記するときには、「空性A+」と「+」付きで表記して、全領域『多元領域』であることを示すことにする。

同様に、人間の見解である空性に関しても、皆空と比較するときには「空性+」又は「空性B+」と「+」付きで表記する。

□時間軸の中で変化し、変容し、生じ、滅し、再生し、離れ、結合し、集まり、散じる、虚無と無常の代表のようだった五蘊が、そして受想行識が、実は生命に満ちあふれた空性+であり、そして完全空であることが明らかになった。

観音様の見解では、時間軸を超越した空に満ちた世界を、『人間』は、それを時間軸の中で辿りながら、《宇宙の生命活動》を成就する。

観音様の見解は《宇宙》はそのまま皆空（「空性A+」）で全肯定されているが、それを時間軸で辿っていく「人間」から見れば、「空性+」（後述）の領域が少しずつ広がって、「空性A+」に近づいていくことになる。

ここで観音様とは、肉体を持たない色の立場である。或いは色と受想行識が一体化した立場である。即ち、本質的には『人間』と同じ立場である。

その意味でも、観音様の見解は常に重いのである。

《宇宙の生命活動》とは、当然時間の流れの中（←時間軸の中）で成就するものである。

「悟りA」に対して、「悟りB」が、空性Aに対して空性Bが、色不異空に対して、色即是空が、対応して位置付けられた今、《宇宙の理念》に、時間軸の要素が明確に加わったことになり、空の概念はかなり普遍化したと言えよう。

空性Aに対する空性Bの空は、第四節で明確な意味を持つので、記憶しておいていただきたい。

現実世界の中で生きる「人間」は、時間軸に拘束されており、この時間軸中では、《宇宙の生命活動》は変化変容こそが本質である。生きるエネルギーが躍動していて、それ故に停滞を嫌う。この真実から、常に変化変容する中に、《宇宙の理念》が生命として表現され続ける。

もちろん、生命とは空の中に展開する。そして生命とは肉体の生命だけのことではなく、空そのものが生命である。般若心経ではこの後、生命活動の場を管理する空相が定義され、空の分類は合計三種類となる。これらの空の正確な定義は、第四節に示される。

場合分けによる説明

□色不異空 空不異色は原則論であり、色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是は、「人間」の現実世界の時間軸に拘束された中からの見解である。

即ち、時間軸上で解釈すれば、空に成っていても、いなくても、錯覚が有ろうと無かろうと、色の立場は空であり、空に登って行こうとすれば、色から直ちに空に帰還できる。そして、同様に、空の立場に居て、空から色に降りて行こうとすれば、空から直ちに色に展開できる、いうことである。

帰還する空は、空全体ではなく、色の出発点の自空である。（巻頭図を参照）

帰還とは自分の生家に戻るような感覚であり、そこは常に安心する場所である。

以後、いちいち自空と断らないが、「空への帰還」とは「自空への帰還」の意味である。

さて、悟りを完成していれば、即ち空に成っていれば、受想行識も色と一緒に、「空への帰還」を果たすが、それも直ちに可能である。

それを全ての「人間」は、何生もかけて成就しようとしているのだ。

しかしながら、道を求める修行者は、「無の修行」という手法で、受想行識は色の主導で、この色即是空 受想行識 亦復如是の道を一気に駆け上がり、「空への帰還」を果たそうとしているのだ。

そして一旦空に至り、悟りを完成させれば、受想行識はいつでも、色と共に、直ちに空に帰還し、そして展開するために、自由に往き来できるようになるのだ。

ここまでの、『空に成る』、『空に帰還する』、『空に至る』という表現は、受想行識の「随意思考」の立場での発言である。

多くの「人間」は、これから空に帰還する立場であり、この表現となるが、空になっている立場で言えば、『空から『色と受想行識』に戻る』『空から『色と受想行識』に展開する』という表現になる。この立場の転換は次節以降で詳しく説明する。

□ここで第五節以降で詳しく述べることになる「無の修行」とは、未だ空に至っていない（と、錯覚している）生身の体を持ったまま、現実世界を生きながら、「空への帰還」を実現するための方法論となるのである。ここでも受想行識の「随意思考」は常に色の「不随意思考」主導で行動するのだ。

□さらに「空からの展開」とは、空の中から、時間軸に沿って、『色と受想行識』に降りてきて、『宇宙の理念』を地上に表現することであり、その事で悟りを完成させつつ、救済を実現することである。

「空からの展開」こそが悟りの本質であり、救済の本質であり、『宇宙の生命活動』に直接参加することである。

宇宙の生命活動として解釈する

空の世界は時間軸を超越しているのだが、現実世界で現実を生きている限り、悟っても悟らなくても、「人間」はそれを顕在意識で自覚して生きているわけではない。

従って、現実生きる「人間」は、空に至っても、顕在意識では相変わらず明日何が起こるか分からない立場で生きていることになる。

このように、現実生きる「人間」は空に至っても至らなくても、顕在意識で見る限り、時間軸に拘束されている「人間」である。

「人間」側から言えば、この現実を生きながら、「無の修行」により、空に到達することで、やっと現実世界に生きる「人間」が『宇宙の理念』と繋がっている事を確認することが出来る。即ち、「空への帰還」を経験出来る。このとき、受想行識は色に繋がり、本来の姿に成った、言えるのだ。

この時、顕在意識では、明日何が起こるか分からない「人間」でありながら、実は、受想行識が色に心を向けて、超越思考の状態にあれば、空の最深部に直結した超越意識からのベクトルの指示を直接的に受けられるようになって、時間軸を超越した判断の下に、『色と受想行識』は一体となり、全て分かっていると同じ事が出来るようになっていく。

そして今度は、顕在意識は何も分からなくても、超越意識からのベクトルを色も、そして色を通して受想行識も受けていて、明日何が起こるか全て分かっている空の立場に立った「空からの展開」を実践し、「現実世界に生きる「人間」」に降りてきて、時間の経緯をたどって、『宇宙の理念』をこの「現実世界」に投影して表現することが出来る。

そして、より本質を言えば、色は、明日のことが分かる、分からない、という能力だけではなく、明日の運命を直接創り出す能力を持っているのだ。

つまり、その『人間』の活動こそが、「人間」が時間軸に拘束されながら、時間軸を超越して生きる意味であり、それが「人間」の生活を含む『宇宙の生命活動』なのである。

これは決して超能力などではなく、時空を超越した空に繋がって生きるからこそ出来る極々自然の生きる姿勢なのである。

空を現実に降ろして説く

□初期仏教を極め、後は般若波羅蜜多の行と瞑想で悟りを完成させるだけの舍利子役（←役柄）に対する説教としては、もう十分であろう。

舍利子であってもなくても、悟っていてもいなくても、「不随意思考」に係わる色こそ空であり、『超実体』であり、その最下層が肉体であり、肉体の生死に関係なく存在し続ける。従って、色不異空 空不異色 色即是空 空即是色はそのまま成立する。

そして次に、受想行識 亦復如是だが、空に至っていない人にとっては、時間軸上で見る限り、「随意思考」に係わる受想行識は未だ空に至っていないので受想行識 亦復如是は成立しない。

成立しないからこそ、般若波羅蜜多の瞑想と行があるのであり、これから「無の修行」が始まるのである。修行は主として、「随意思考」の為にあるのである。

□同じ事なのだが言い換えてみよう。

受想行識+色は既に空の中にあつて、悟っているのであり、悟っていないと思う錯覚があるだけである。空の立場から言えば、舍利子でなくても、誰にでも、色不異空と空不異色、色即是空と空即是色は成り立つのであり、錯覚を取り除けば、受想行識 亦復如是も含めて成り立つのである。第五節から始まる「無の修行」は、舍利子にとっては空を深めて悟りを完成させ、空を安定的に保つ修行であると同時に、未だ空に至らない「人間」にとっては、これらの錯覚を取り除く修行でもある。

◆解説キー◆ 『自分の所属する色、即ち色の「不随意思考」は既に悟っている』と知ることは大いなる救われである。生きる勇氣百倍と感じ取って欲しい。

□色の「不随意思考」は既に悟っているのであるから、受想行識の「随意思考」としては、色に一体化して、「超越思考」を得ることが、空に成る事と等しい。超越意識に一体化することと同義である。

従って、修行の対象となる受想行識に関して、悟りとは、『受想行識が空に成る』と言うよりも、『受想行識が色と一体化する』ことである。

空の体験から語る空

◆解説キー◆ 受想行識の「随意思考」の立場と、既に空となっている色の「不随意思考」の立場がある。両者の調和した関係を構築することが、救われに直結するのだ。そのための「無の修行」と、空に至った後の「空からの展開」がある事を何度も何度も繰り返して示している。

□ここに述べていることは、私の実体験から到達した新しい解釈であり、『現代を生きる多くの空候補生と是非、理解を共有したい』という主旨で書いていることを申し添えておこう。

□実体験から言えることは、修行者は、決して空を実体が無いとしてはいけぬ。邪念と種々雑多な妄想や執着による障害から一旦離れるために、「随意思考」を「随意思考」で越えるために、一切を無として修行するのである。その結果、最終的に、『多元構造』の中に、人体の自律神経系よりもさらに緻密で、複雑な超高密度の「実体」、即ち『超実体』そのものを『宇宙のフラクタル構造』として、空の外観を知ることができるのだ。

第五節以降で詳しく述べることになる「無の修行」では、錯覚を排除するために、一旦受想行識が勝手に認識している存在の全てを実体が無いものと見なし、排除し、否定し、不完全なものを見なし、それに徹することで、最終的にどうしても否定し得ない存在として、厳然として見

えてくる本質が空なのである。従って空は《普遍の真理》であり、存在そのものである。

□本書では、空を最終的に到達する結果そのものとして、それを《宇宙の根源》、《宇宙の理念》《宇宙の秩序》《宇宙の生命活動》としている。

つまり、実体が無いとするのは空に至る手段においてであって、最終到達地点そのものではない。最終的にいくら否定しようとしても、決して否定しようのない『多元構造』としての『超実体』が見えてくるのがまさに真実であり、《宇宙の理念》そのものである。

□空とはどこまでもどこまでも、もういい加減嫌になるくらい、その言葉の概念を固定したくない、との理由から、その名称を付けているのだと言える。言い換えれば、仏教でありながら、それを仏陀とは呼ばず、「決して人格名を付けなかった」というところが、最も普遍的な表現であり、求めているものが絶対普遍の存在であることが分かるのである。

求道者が求める究極の存在を、あえてその手段から空とし、その真実に対して明確なイメージを持たせることを避けたのであり、原典となるサンスクリット語においても、虚無の意味を持つ語句を漢語の空に当てていることに、玄奘三蔵もその趣旨を十分にくみ取っていると見えよう。

現代は科学技術が進歩したことに伴い、語彙も豊富になり、抽象的概念の表現もかなり自由に出来るようになった。そこで、先人の言葉に対する概念の固定化への気遣いを十分に尊重しつつ、本書では、直接的にそれを《宇宙の根源》《宇宙の理念》《宇宙の秩序》《宇宙の生命活動》と呼んで話を先に進めようと思う。

□般若心経を解釈していて、私には、『『人間』とは、何とすばらしいものなのか！』と聞こえてくる。

元々『人間』とはそのような存在なのであり、色は既に空であって、《宇宙の理念》に繋がっているのだし、後は受想行識に係わる潜在意識の玉石混淆の体験重視のベクトル障害により、自覚できていないだけの話なのである。ベクトルは玉石混淆であるが、ここで特に空に共鳴する「ベクトル共鳴」を『フラクタル共鳴』と言うのである。

今はまだ、人生に消極的で、苦厄の中にあつたとしても、将来、正しい理解に至り、それを実践したいとさえ思えば、その瞬間から運命のベクトルはその方向に向くのだ。

第三節 おわり